就任にあたって

岡　澤　憲　芙（図書館長）

20世紀後半から21世紀前半へかけて日本が直面する政策課題は国際化・高度情報化・高齢化・成熟化であるといわれている。こうした政策課題の解決過程で、決定的な発想の転換が要求されよう。経済効率を至上価値として成長路線を猛烈に突っ走る経済大国の論理から離脱して、一人ひとりの市民が、日常生活で豊かさ・ユトリ・多様性を実感できる生活大国の論理への切り換えが必要であろう。これまでのように、物質的ユトリだけでなく、時間的ユトリ、空間的ユトリ、気持ちのユトリが追求されるようになろう。また、自己決定・自己選択・自己投資という価値が重視されるだろうし、それを実現するためにも、複数の選択肢と同時に選択幅の拡大が要求されよう。もちろん、選択能力を常に学習できる環境（生涯学習環境）も整備されることになろう。こうした成熟化は、生活空間の充実への要求にもつながる。住空間、通勤・移動空間、労働・職場空間、余暇・学習空間、社交・交際空間、社会活動空間、休息・療養空間、どれもがさらなる整備を待っている。

わたしたちを取り囲む情報環境は、こうした価値観に直撃されて、飛躍的に複雑・多岐化している。情報過程は、つまり情報を生産→収集→分類→蓄積→検索→加工→利用する過程は、情報要求の多様化に即応して、ますます複雑化している。科学技術の飛躍的発展がそれを一層加速する。現代における変化の主たる源泉は新しい科学と技術の生成・衝撃であるが、科学・技術・情報が時間と空間をますます圧縮するであろう。

例えば、国際化の進展は、想像以上の速度で、「国境線を超えた情報の相互作用」を現出させている。日本の語学教育は伝統的に大国中心主義であったが、それではとてもカバーできない情報が大量生産され、それを必要としているのに、情報システムそのものがせいぜい英・独・仏・中・露・西語などにしか対応できないとすれば、時代の

ニーズに応えられるわけがない。さらに、伝統的な分類法では適切なカテゴリーを発見できない、学問領域が突然出現することもあろう。また、複数領域に跨がる研究業績が生産されることはもう珍しくなくなった。分類法の技術革新が遅れたために、ユーザーが適切な情報に接近できないという事態も発生してこよう。リサーチ・フロントの最新情報を常に把握できる体制の確立が急がれる。その一方で、情報メディアの多様化も想像以上の速度で進展している。学問領域の性格によっては情報要求が、電子メディア、映像メディア、音声メディアへと傾斜を強めているのに、多くの情報システムは依然として活字メディアもしくは印刷メディアへの対応を機軸にしているかもしれない。とにかく、情報環境はいま極めて挑戦的である。世界を視野にいれた研究・教育の拠点として。